九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

図書館の目指すべき方向 ： ライブラリアンと語る

有川, 節夫
九州大学総長

https://hdl.handle.net/2324/16484

出版情報：丸善ライブラリーニュース. 9, pp.1-3, 2010. Maruzen
バージョン：
権利関係：

MARUZEN
ISSN 1883-5767
丸善ライブラリーニュース　第９号（通号 160 号）2010 年２月 22 日
発行 / 丸善株式会社　発行人　小城武彦

LIBRARY NEWS

第９号

図書館の目指すべき方向
～ライブラリアンと語る～

九州大学総長　有川 節夫

九州大学は２０１１年に創立百周年を迎えます。「知の新世紀を開く」をコンセプトに百周年記念事業に取り組む中で、伊都新キャンパスを中心として世界に開かれた学術研究拠点を建設中です。教育・学術研究拠点として着実な歩みを進める九州大学において、２００８年の総長就任直前まで附属図書館長として多くの課題解決に取り組んでこられた有川総長に、表題についてお伺いしました。

■三つの理念

濵﨑事務部長（以下濵﨑）有川総長は、昨年までおよそ足掛け10年間にわたって九州大学附属図書館長を務めてこられましたが、この間、どういった理念、基本方針をもって、図書館の経営に当たってこられたのかを、最初にお聞かせください。

有川総長（以下有川）館長時代に三つの理念を定めました。一つは、学生の立場から「学習と情報収集のために、行かずに居られなくなるような学問的な雰囲気と活気に満ちた図書館」であるべきだということ、二つめは、研究者の立場から「体系的な蔵書と豊富な研究資料が確保され、ネットワーク社会の恩恵を存分に享受できる機能的で充実した研究図書館の実現」、最後に、国立大学の法人化が目前に控えていましたので、「経営感覚を備えた事業体としての大学図書館の運営」です。これらの理念を基本に、明確な方針からの帰結として、全ての問題に対する解決策を探るというわけです。

一つめについては、学生が「今週は一回も図書館に行っていないから、何か気持ち悪い」という思いを抱くような方向にもって行けないかと強く思っていました。かつて、大学における活動は一般的に「研究・教育」と称されていました。しかし、教育の方が大事ですから「教育・研究」の順番であるべきで、さらに、大学には学部学生が居るからこそ大学だという意味を込め、「学習」を前に置き「学習・教育・研究」と言うことにしました。そうすると、学生を大事にしているというメッセージが伝わります。また、学部学生の視点で図書館を見ることで、図書館がやるべきことが見えてくるのです。

二つめの理念の中で挙げた、ネットワーク社会の恩恵というのは、いわゆる資料の電子化です。当時、電子ジャーナルはまだそれほど定着しておらず、平成８年に学術審議会から出された建議（大学図書館における電子図書館的機能の充

実・強化について）の中でも、電子ジャーナルに関する言及はありませんでしたが、急速に電子ジャーナルが普及する時代が間違いなく来ると思っていました。

三つめの理念に関しては、折から大学改革の大きな嵐が吹き、最終的に国立大学は法人化したわけですが、図書館は大学の一番大事な組織であり、必須の装置です。改革というのは、「今がなってないから、良くしろ」ということですが、大学が「なってない」と言われるということは、その一番の根源は、実は図書館にある。つまり大学改革は図書館からやった方が良いと考えたわけです。まず、大学における図書館の重要性を再認識してもらうということをやりました。その上で、図書館がいつもポジティブなことで話題になるようにしたいと思いました。

嚶鳴天空広場 Q-Commons（伊都キャンパス講義棟内のラーニングコモンズ）

そのためには、図書館の職員に明るく振舞ってもらわなきゃいけない。自分たちが大学の中枢であるという意識を持てば、必然的に立ち振る舞いは明るくなってきて、ユーザーに信頼され、それがまた循環し、正のスパイラルに入っていくと考えました。

大学基準協会が出している「大学図書館基準」というのがあり、最初に出されたのは昭和27年で、それが昭和57年に改定されています。改革をやるときには、新しいものに則るよりも、古くから言われている事についてやった方が良いという思いがあり、しかも「大学図書館基準」には非常に立派なことが書かれているので、これを指針としてやったわけです。以後10年近く図書館に携わることになりましたけれども、基本的にこの考え方は、1ミリもぶれていないと思っています。

濵﨑　当時の有川館長が最初に使われた「学習・教育・研究」というフレーズは、今や、大学図書館界において一般的に用いられるようになっています。

■具体的な取り組み

濵﨑　さて、お話いただいた基本的な方針、理念に基づき、図書館長在任中に多くの課題解決、改善をされてきたわけですが、具体的な取り組みを少し紹介いただければと思います。

有川　館長になって愕然としたのは、図書館玄関の両脇におびただしい数のロッカーがあったことです。当時はセキュリティの問題もあり、ユーザーはロッカーに荷物を全部置いて入館していました。しかしそれでは、図書館にとって一番大事なユーザーを信じていないことになります。そこで、ロッカーを退けるということをやりました。

次に、開館時間の延長を実施しました。セキュリティの問題も考慮し、公共交通機関が動いている時間が一つの妥当な線だということで、現在は朝8時から夜10時まで開館しています。8時開館ですと、1限目の講義が始まる前の30分、ちょっとした調べものをしたりできます。授業との連携も大事なことです。

また、蔵書構築は図書館の基本中の基本ですが、当時は基準がありませんでした。学生図書の選書基準もちゃんとしたものがなかったものですから、それを整備しました。選書や蔵書構築に深く関わることにより、図書館職員の意識がそれまでと全く変わってきたのではないかと思っています。

研究図書館機能の整備・充実、電子図書館機能については、電子ジャーナルの整備を行いました。雑誌の重複調整により、実質的にプラスアルファの予算を使わずに導入することができました。

さらに大事なのは、書誌情報データベースの整備、遡及入力です。私が館長になった時、データ入力しなければいけない図書が約160万冊ありました。5年間で入力を完了させる計画を立て、毎年6,000万円の予算をいただいて遡及入力をやりました。九州大学の移転計画など考えますと、図書館にとっては所在情報を管理するものがないと大変なことになるということで、当時の総長に説明し了解を得たのです。

こうした取り組みを実現するには、財政的な基盤の確立が必要です。現在、各部局に配分される予算のおよそ1割が図書館経費になっています。電子ジャーナル経費の全学共通経費化も達成し、図書館の予算規模は相当大きくなっています。

濵﨑　財政基盤の確立という点では、予算が平成10年から約5・5倍になりました。この間、学内ではさまざまな図書館の取り組みが評価される状況になってきています。また、例えばRFID（ICタグ）への取り組みなど、全国に先駆けてやったことも多く、大学図書館界において九大は牽引者の役割を果たしてきたと言うことができるのではないかと思っています。

■図書館への思い

濵﨑　今度は、総長ご自身の図書館に対する思いや、図書館を変えたいという持続的なモチベーションは何かということをお話くださいませんでしょうか。

有川　私は大学院生の頃、非常に新しい情報科学の分野で、言語学や心理学の領域にもまたがる研究をやっていました。指導教官は在外研究で長期外国出張をされており誰にも相談できず、しかも新しい文献を手に入れて勉強しなければいけないという状況で、当時の図書館の職員に大変お世話になりました。偉い教授でもない、ひとりの大学院生のことを真剣に考え必死に文献を探してくれるのです。その人達がいなかったら、研究分野を変えなきゃいけなかっただろうし、その後どうなったか判らない位お世話になりました。素晴らしい能力をお持ちだったと

今でも思っています。さらにその後、助手になった時に指導いただいた先生が、図書館長を結構永くやっていた方で、若い私達に図書館の重要性を熱っぽく語っておられました。そういった経験も背景にあったと思っています。図書館で勉強するという雰囲気は、学生にとってすばらしいことだと思っています。

■学術情報基盤をめぐる動き

濵﨑　現在、先生は科学技術・学術審議会の委員で、学術情報基盤作業部会の主査も務められ、さらに、国立国会図書館の科学技術関係資料整備審議会委員長も務められています。学術情報のあり方に関して国のレベルで考えてこられ、影響力をもっていらっしゃる訳ですが、ここ数年の学術情報流通基盤としての大学図書館をめぐる動きについて、少しお話くださいませんでしょうか。

有川　学術情報基盤作業部会での審議に関しては全てオープンになっておりますので、傍聴も可能ですし、発言等は議事録としてＷｅｂサイトでも公開されています。コンピュータとネットワーク関係、大学図書館と情報発信をテーマにしてやっていまして、現在、前の二つについては、それぞれ審議のまとめを出しています。ネットワーク関係については、ひと頃、日本の整備が遅れていると言われることもありましたが、現在はＮＩＩを中心に、世界に誇れるようなネットワーク環境が整備されていると思います。それを今後も同じように維持・発展していかなければいけないと思って進めています。

現在は、図書館の整備、学術情報流通の在り方ということで、図書館はどう在るべきかを審議中です。平成21年7月の段階で、電子ジャーナルの効率的な整備、学術情報流通改革の推進について中間まとめを出しました。電子ジャーナルについては、特定出版社の寡占状態が続き、また購読可能なタイトル・雑誌が増えてきていることもあり、価格がどんどん上昇しているという状況です。それに対して大学側がついて行けないという大きな問題があるのですが、契約のあり方、契約に携わる人の養成なども必要であるといわれる一方で、電子ジャーナルの問題をダイレクトに捉えるだけではなく、出版業界が学術情報を扱う上で、どういったやり方でやっていったらいいのかということや、新しいビジネスモデルなども考えていったら良いのではないだろうかということも話されています。

ネットワーク社会においては、インターネットに象徴されるように、インフラとしては脆弱であったはずのものがあっという間に定着してきたわけです。それをただ驚いているだけではなく、学術情報の流通というところから見てみる必要があるのではないかと思っています。

そういった観点からも、機関リポジトリの活動は非常に大事で、新しい研究成果を必ず機関リポジトリに置くという習慣が定着すると、学術情報の流通は劇的に変わると思います。そうなった時の電子ジャーナルのあり方を、出版社もお考えになればいいのだろうと思います。

先生方の研究成果の評価に関する議論は、インパクトファクターの問題も含めいろいろありますが、いい研究者は、いい機関に移ろうとします。そうすると、いい機関にはいい機関リポジトリがあり、みんながよく見てくれるようになる。昔の情報検索のＳＤＩサービス[1]のような感覚をもって機関リポジトリが定着し、アクセス回数、ダウンロード回数、サイテーションといったデータがしっかり出てくれば、機関に関するインパクトファクターのようなものも出てくるはずです。

さらには、査読文化さえも変わる可能性があります。機関リポジトリの文献は、最初は玉石混交しているかもしれませんが、時を経るうちに、アクセス件数のうんと高いものがいいとか、引用されているから、読まれているからいいという評価が確立していく。査読とは別の形での評価が生まれることにより、学術出版のあり方が根本的に変わる可能性があります。学協会や出版社が成り立たないということを言われますが、フレッシュな論文は機関リポジトリでいち早く出しておいて、古典的な文献や、一定の基準を超えたようなものだけを印刷媒体や電子出版で販売するという商業モデルも考えられます。

国会図書館では、ネットワーク上にある学術情報をどうアーカイブしていくかが問題になっています。日本で出版されている図書は納本制度があるけれども、ネットワーク上の資源については、なかなか難しい。例えば大学が統合、あるいは消滅という状況になったとき、そこが蓄積した電子的な情報をどうすべきかと考えますと、これは国会図書館にお金を払ってでも預けることが必要で、それは出版する人達の文化であるし、倫理につながることだと思います。貴重な文化的・学術的な資源が散逸し、消滅しないよう、国会図書館に預託しアーカイブしてもらうことを、大きな国が幾つか世界中でやれば、なんとかなるのではないか、と私は考えています。

注

1）SDIサービス：Selective Dissemination of Information 利用者が関心を表明した主題分野の新しい出版物、レポート文献、あるいはその他の情報源について、その利用者に定期的に通知する、図書館などの情報機関が提供するサービス

インタビューは2009年12月25日、附属図書館館長室にて、図書館職員の皆様と一緒にお伺いしました。聞き手は附属図書館事務部長濵﨑修一氏にお願いしました。なお、本インタビューの後半は、職員の皆様からの質問にお答えいただく機会をおとりいただいております。紙数により、次号掲載予定します。